公園で・・・

前川美和

一、　発見

寒川秀平は今朝も五時半に起きると、ジャージの上下を身につけ、黒いキャップをかぶり、家を出た。娘の佐和子はまだ寝ている。長年連れ添った妻をおととし癌で亡くしてから、長女の佐和子の家で世話になっている。亭主も孫たちも皆優しくしてくれるが、実の娘とはいえ、七十近くになって同居するとなると、なにかと気を使うものだ。これといって趣味もない秀平は朝夕のウォーキングを日課にしている。コースは決まっている。まず、池をいくつか横目で見ながら、ニュータウンの方へ上っていく。寒くなると、どこからかカモが池にやってきて、冬を越すのだが、まだ十月に入ったばかりで、日中は暑いくらいだからか、カモの姿は見えない。小豆色の水草が池一面に広がって、水面がほとんど見えず、息苦しさを感じる。ニュータウンの自治会館まで行ったら、あとは下りだ。下りきったら、小さな川にぶつかるから、その川をゆうゆうと泳ぐ大きな鯉たちにあいさつをして、最後にＳ公園の中に入り、公園を三周するのだ。

十数年前にできた公園は定期的に草刈や掃除がなされ、今もきれいに保たれている。公園を囲うフェンスに沿って植えられた夾竹桃の木々が葉を茂らせ、盛りの過ぎたピンクの花を二つ、三つ、つけている。老若男女がそれぞれ異なる目的を持ち、三々五々集まってくる。朝夕は歩く人、午前中は保育園や幼稚園にまだ行っていない子どもたちとお母さん、夕方になると、小学生たちが学校から帰ってきて集まるし、昼寝を終えた小さい子供たちも母親や祖母、祖父に連れられてやってきて、砂場や滑り台で遊んでいる。子どもたちは夏から秋にかけて、虫網とカゴを手にして走り回り、バッタやカマキリなどを捕まえて、歓声を上げている。九月の初め頃までは六時を過ぎるまでカンカン照りで、滑り台も熱くなって滑れたものではないが、十月に入ると、さすがに朝夕めっきり涼しくなった。

秀平はいつものようにウォーキングコースの閉めのＳ公園に入った。深夜の集中雨のせいで、普段ならフワフワと弾力のある草たちは水を含んで、足にまとわりつく。公園の砂場も大きな水溜りになっているのが見えた。入り口付近に設けられた花壇に咲き始めたコスモスのピンクや白い花も雨に打たれたからか頭を垂れている。その少々背の高いコスモスたちの葉の間から、制服を着た女の子がベンチの下に倒れているのが見えた。秀平は「へっ」というような声を上げ、駆け寄った。

「えっ！　あやちゃん？　向かいのあやちゃんか？」

女の子の土気色の顔は長い髪の毛が張り付き、少しも動かない。秀平は恐る恐る顔に触れ、あまりの冷たさに慌てて手を引っ込めたひょうしに、尻をついてしまった。女の子は苦しげな表情を浮かべ、携帯を握ったまま、硬くなっている。秀平は、娘に言われて、いつもウェストポーチに入れてある携帯を引っ張り出して、覚束ない手つきで一一〇を押した。

世間がまだ目を覚ましきっていない土曜日の六時半頃Ｓ公園周辺にはパトカーのサイレンの音が何重にも響き渡った。
少女の名前は吉川あや。県立Ｋ高校の二年生で、家は公園から歩いて十分程度の少々高台にあった。両親と姉との四人暮らしで、暮らし向きは裕福というほどではないが、中流の上くらいの平凡な家庭とみられた。解剖の結果、外傷のない遺体の状態から何か毒物による死であると思われた。死に至る状況が分からず、ベテランの佐山刑事が陣頭に立って、自殺、他殺両面から捜査することになった。昨夜遅く激しく降った雨で解決の手がかりとなるような証拠はきれいさっぱり流されてしまい、現場に残されたものはといえば、あやが座っていたベンチの下にひっくり返っていたプラスチックの透明な四角いケースだけだった。何か生き物を入れておいた容器だと考えられたが、何が入っていたかは不明だった。また、死亡推定時刻は昨日、四日午後六時から八時ということで、まず、きのうの夕方から公園にいた人と、あやの家族や友達に話を聴くことになった。

二、　証言

寒川秀平
第一発見者。六十九歳。

わたしは毎日、朝夕二時間くらい歩いています。死ぬまで自分の足で歩きたいですからな。今朝もウォーキングしていて、いつもコースの最後に寄るＳ公園であの子を見つけたんです。近所の子なんで、話はせんけど、顔はよう知ってます。吉川さん家には娘さんが二人いて、お姉ちゃんはさっちゃんといって、確か看護婦さんしてるんかな、元気がよくて、大きな声で挨拶してくれます。下のあやちゃんは、会うと恥ずかしそうにニコッと笑って頭下げてくれましたな。かわいかったですよ。何でこんなことに…。
きのうの夕方、六時過ぎに公園を歩いてたとき、ベンチに一人ポツンと座ってるあの子を見かけましたな。何をしてたかって？　さあ？　そこまでは…。ちらっと目に入った程度ですからな。公園にはほかにだれもいなかったんちがいますか。あっ、そういえば、公園を三周して出ようとしたとき、入れ違いに年配のご夫婦が公園に入って来ましたわ。名前は知りませんけど、時々お見かけするから、ご近所の方じゃないですか。お二人とも七十前後やと思いますよ。ご主人は私より少し背が高くて、ほっそりしてて、きれいな白髪ですわ。奥さんの方は白髪交じりの髪を短くした小柄でかわいらしい感じの方ですわ。いつも仲良く何か話しながら歩いてるんです。羨ましいですわ。うちも女房が生きてたら、二人してウォーキングできたのに。たばこも吸わんのに肺癌になって、あれよあれよと言うてるまに無いようになってしもて…。二人でもっと色んな所行って、色んなことして楽しんどけばよかったなって思います。居るんが当たり前やと思ってて…。まさか先に逝かれるとはね。
散歩したあとは家に帰って、娘や孫と晩御飯、食べました。

斉藤　一、美子夫妻
寒川秀平がすれ違った夫婦。

二人でよくS公園に行きますよ。広くて、メンテナンスも行き届いていますからね。屋根のあるベンチもあちらこちらにありますし、きれいなトイレも水飲み場もあるでしょう？　疲れたら、一服できるんですよ。わたしは私学で七十二まで英語、教えていました。もう働くのはいいかなと思いまして、去年の春からは毎日が日曜日です。ちょうど妻の認知症も放っておけない状態になってきましたしね。子どもは二人おります。長男は千葉、次男は京都で就職し、結婚して家庭を築いています。それぞれの生きる場所を見つけて頑張ってるみたいなので、親の役目は果たせたんじゃないかと思ってます。まあ、わたしらは夫婦二人で寄り添って生きていくといいますか…。先のことは分かりませんけど、今のところは幸せですよ。ゆっくりと二人の時間を楽しみたいですね。

きのうも妻とS公園に行きました。そうそう入り口で男の方にお会いして、挨拶しましたよ。　時々公園でお顔を見かける方ですが、かくしゃくとしていらっしゃる。まっすぐ前を向いて、顔を上げて歩いていらっしゃいますね。

女の子？　K高校の制服を着た子がいましたよ。えっ！　あの子が亡くなったんですか？　何があったんですか？　今朝公園で死んでたんですか？　どうして？　ちょっと暗い表情、してたかもしれませんね。きのうあの子はベンチに座って、何か本見てたかな。わたしたちがゆっくり公園を二周してきて、ベンチに腰掛けて、コーヒーを飲もうとしたんです。水筒にいつも熱いコーヒー入れて持っているんですよ。紙コップと砂糖とミルクも水筒のケースのポケットに入れて…。近所をウォーキングして公園で一息つくとき飲むんです。妻はコーヒーが好きなものでね。きのうは日が落ちると、急に肌寒くなってきたんで、あの子にも紙コップにコーヒーを入れて、あげました。ありがとうって言って、コップを受け取って飲んでました。二言三言喋って、コーヒー飲み終わったら、わたしら腰を上げました。女の子には、早く帰らないと寒くなってくるし、お家の人も心配するよって言って、わたしらは帰ったんです。家には七時頃着いたでしょうか。　あの子がその後死ぬなんて…。何か悩みがあったんでしょうかね。毒物なんですか？　コーヒーはわたしらも飲んだんですよ。水筒はもう洗ってしまいました。（一　談）

小学生の男の子たち
小学三年生　陸・猛・良平
小学四年生　淳・類
小学二年生　大(淳の弟)

ボクたち、学校からいったん家に帰って、自転車で公園に集合したんだ。何時って？　みんなが集まったのは四時くらいかな。公園に大きな時計台があるでしょ？　あれで時間が分かるんだ。塾とかそろばんに行かなくちゃいけないとき、あの時計を見て、帰るんだよ。何してたっけ？　広場でドッヂボールやってたよ。小三のボクら三人と、小四小二合体チームでやってたんだ。三対三で。あっ、思い出した。そのボールが飛んでいって、ベンチに座ってたおねえちゃんのケースに当っちゃったんだ。ケースが落ちて、中のカエルが逃げ出したみたいでさ。おねえちゃんがめちゃめちゃ慌てて、「青いカエル、捜して！　でも、毒あるから、触っちゃだめよ」って、泣きそうになってたから、ボクたち責任あるし、みんなであちこちカエルを捜したんだけど、見つからなくてさ。どうしようかなって困って

たら、おねえちゃんの友達が来て、おねえちゃんが「ボクたちもういいよ。ありがとう」って言ってくれたから、カエル捜すのやめたんだ。友達？　男の人だったよ。それから、みんなで自転車競走して遊んで、五時半に家に帰ったよ。（類　談）

オレさ、家に帰っても、お母さん、パートに行ってるし、お姉ちゃんもクラブで遅いし、だれもいなかったから、すぐ公園に行ったんだ。一人で家にいても、つまんないでしょ。あのおねえちゃん、もういたよ。で、少ししたら、バイクに乗った男の人が来て、あのケース渡して帰ったよ。オレ、砂場のタイヤブランコに乗ってて、ちょっと離れてたから、声とか聞こえなかったけど、おねえちゃん、うれしそうに笑ってたよ。（猛　談）

中学生の女の子たち三人

まゆ

栞

悠子

わたしたち、部活早く終わったので、えっ？　クラブ？　バレーボール部です。ちょっと喋ろうかなって、S公園に寄ったんです。五時過ぎだったかな。あそこ、屋根のあるベンチが四箇所あって、わたしたち、階段上ったとこにあるベンチに行こうと歩いてたら、下の広場のそばのベンチで吉川先輩、バレー部のOGなんですけど、男の人と話してました。なんか深刻そうな顔して話し込んでたから、先輩、わたしたちに気、つかなかったんとちがうかな。吉川先輩はバレー上手だったけど、おとなしかったから、クラブでは存在感あんまりなかったかも。先輩のなかには後輩に偉そうに命令ばかりしたり、いじわるしたりする人もいるんですけど、吉川先輩はそんなこと全然しない優しい先輩でした。（まゆ　談）。

一緒にいた人、割とかっこよかったな。年上って感じ。知らない人だったよ。吉川先輩、もててたからな。で、階段上がったら、お目当てのベンチには高校生くらいの女の子が座ってたから、わたしら、左手のベンチに陣取ってガールズトークしてたんだ。（栞　談）

その女の子の顔はよく見ませんでした。後ろ向きに座って、本、読んでたし。　でも、なんとなく別の先輩に雰囲気、似てたかも。分かりません。日が沈んだら、めっちゃ寒くなってきたから、「もう帰ろう」ってことになって…。わたしら帰るとき、ベンチの女の子も先輩もまだいました。

（悠子　談）

川端頼子

孫を連れて公園にいた人

三歳になる孫を連れて、よく公園に行きますよ。公園が好きで走り回ってますわ。旦那と別居中の娘がフルタイムで働いてるんで、朝七時半には孫を放り込みに来るんでね。孫守り大変ですよ。別居？　もう二年になるんですけどね。相手がなかなか離婚してくれなくて…。娘には愛情のひとかけらも残ってないけど、子どもには執着してましてね。「親権取られるくらいなら、嫌いなおまえと夫婦でいるほうを選ぶよ」って言いましてね。子

ども、かわいいんは分かりますけど、ちょっとね。調停もしたんですけどね。埒が明きませんわ。最後は裁判になるんですかね。みんなよう言ってますやろ。結婚するんは簡単やけど、離婚はむずかしいって。実感してますわ。

そやそや、きのうの事ですね。四時過ぎに孫を保育園に迎えに行って、その帰りに公園に寄ったんです。滑り台、二、三回滑ってから、砂場でままごとしてました。小学生の男の子たちがドッヂボールしてましたね。あの日は不思議なことに男の子ばっかりでしたよ。で、急にベンチに座ってた女の子が「カエル、カエル」って叫びだして、男の子たちが捜しはじめたんで、わたしも一緒に捜したんです。毒があるとか言ってたし、あぶないでしょ？　小さい子は何でも口に入れますからね。一生懸命捜したんですけど、なかなか見つけられなくて…。五時頃かな、若い男の人が女の子に近づいてきて、女の子が小学生たちに「もういいよ。ありがとう」って言ったんで、みんな捜すのやめたんです。あの女の子がどうして…。

吉川陽子

あやの母親。歯科医院で受付のパート。四十六歳。

あやは、あやは、どうして死んだんですか？（泣く）　毒？　何の毒ですか？　アルカロイド系の毒？　だれかに毒を飲まされたんですか？　殺されるほど恨みを買うようなこと、あの子がするとは思えません。あの子はおとなしくて、優しい子です。だれかと衝突するようなことはあの子に限って考えられません。自殺？　どうして自殺しなくちゃならないんですか？　お友達もいたし、いじめられたりしてなかったし、成績もまあまあだったし。将来のことは、進路とか、まだ決めてなかったと思いますが、うちはあの子の行きたい学校に進ませてやるつもりでした。私学でも専門学校でも…。自分の気持ちを表に出さない子だったので、何を考えているのかよく分からないところはあったんですけど、自分の殻に閉じこもってるという感じでもなかったと思います。公園で一体何があったんでしょうか。（涙を拭く）

あっ、今思い出したんですけど、ちょっと前に一度、外に出ると、だれかに見られてるみたいで気持ちが悪いとか言ってましたけど、それっきり何も言わなかったので、警察にも届けませんでしたが…。

吉川健三

あやの父親。公務員。五十一歳。

あやに何があったんでしょうか。あやは苦しんだんですか。かわいそうに…。（しばらく涙を堪える）あやは優しい子でした。下の子ということもあって、いつもまず周りの人の顔色を見て、その出方を待ってから、遠慮がちに行動するタイプで、姉のさちとは対照的でした。さちは妻に似て、元気でよく喋る子なので、さちと妻が大きい声で話しているのを、あやは黙ってニコニコ聞いている感じでしたね。体つきもほっそりしていて、どちらかというと、わたしのほうに似ていたのかもしれません。自分の意見をはっきり伝えられないので、優柔不断と見られ、信頼関係を築くのが難しかったのかもしれませんね。で

も、それほど悩んでいるようには見えませんでしたけど…。もっと話しかけてやるべきだったのでしょうね。将来のことは最近真剣に考えているようでした。結論出してからちゃんと話すから、もう少し待っててねって言ってましたね。どうして死ななければならなかったのか…。

吉川さち

あやの姉。看護師。二十一歳。

あやが自殺なんてするわけがありません。ましてや殺されるなんて…。青春真っ只中、あの子なりに進路とかいろいろ悩んでるみたいだったけど、それも解決の糸口が見つかったようだったし。公園で一人でいるところをだれかに狙われたのかもしれません。あやはおとなしい子だったから、はっきり断れなくて、変な人につけ込まれるようなところがあったから。わたしが、もっと自分の思っていることを言ったらって言っても、別に何もって目を伏せちゃうことが多くて。だれか頼りになる人が見つかったら、ずっとその人に守られて生きていけるだろうけど、そんな生き方でいいのって、昨日あの子に言いました。ひとりで生きていく強さみたいなものが欠けてる気がして、姉としてはちょっと心配してました。私の言い方、きつかったかもしれません。でも、それで死を選ぶとか考えられません。人間、知らず知らずのうちに何気ない言葉や配慮にかける行動でだれかを傷つけてしまうものですけど…。

前田祥子

あやの友達。十六歳。

あやが死んじゃうなんて…。信じられません。どうしてですか？　あやは優しい子です。中学のときから一緒だけど、いつもそばにいて、いろんな話、聴いてくれたんです。うちは父も母も医者やってて、わたしにも医学部に行けってプレッシャーすごかったんです。でも、わたしはパティシエになりたいと思ってました。スイーツ食べると、みんな幸せ感じるっていうか笑顔になれるから。調理師学校に進もうと思ってるって、あやに言ったとき、「すごいね。やりたいこと見つかってよかったね」って、とっても喜んでくれて、励ましてくれました。わたし、根気よく粘って両親を説得したんだけど、あやがわたしの愚痴につきあってくれたり、アドバイスくれたから、頑張れたとこがあるんです。あや自身は進路まだはっきり決めてないみたいだったけど、あの子、ああ見えて、両生類とか爬虫類とか好きなんです。何もしゃべらないけど、生きるために、ＤＮＡを残すために地味に頑張っているところが好きだって言ってたな。特にヤドクガエルは色がカラフルでかわいいんだって、よくペットショップに寄ってました。わたしはあんな変温動物、表情もないし、冷たい感じして苦手なんですけど。一度ペットショップに一緒に行ったんだけど、コバルトヤドクガエルやストロベリーヤドクガエル、きれいでした。でも、毒があるって言うし、ちょっと…。

そのペットショップの青田っていう店員のこと何か言ってました。えっと、とても親切

なんだけど、視線がキモいって。　家までつけられたこともあるって。家に帰って二階から何気なく外を見たら、その男があやの方をじっと見てたそうです。ストーカーなんじゃないですか。

青田祐司

ペットショップ店員。二十九歳。

えっ？　いきなり入ってきて、何なんですか？　公園で吉川あやが死んだ？　きのう？　どうして？　殺されたんですか？　刑事さん、部屋に勝手に入んないでよ。

どう？　びっくりした？　オレの部屋にあの子の写真、いっぱいあって。あの子かわいいもん。自分じゃあんまり意識してないかもしれないけど、顔も小さいし、足もきれいだし、恥ずかしそうに話すとこなんか、こうグッと来るんだよね。一度あの子の家までついていったことあるよ。ストーカーだって？　そうかもしれないな。でも、一回だけだよ。写真はたくさん撮らせてもらったけどね。何も危害は加えてないし、嫌がらせとかもしてないよ。まあ言えば、追っかけみたいな。あやちゃんって言ったっけ？　あの子、ちょいちょい店に来てたんですよ。ヘビとかカエルをじっと見てたな。三十分くらい動かないで眺めてるから心配になったよ。寂しいんかな。友達いないんかなって。一度友達と一緒に来たから安心したけどね。友達はあの手の動物は苦手だったみたいで、ウゲッて顔して、すぐ店を出ていっちゃった。

あやちゃん、特にヤドクガエルがお気に入りだったな。アマゾンで獣を倒す矢の先にカエルの毒を塗ってたらしいんだけど、そのカエルのことをヤドクガエルって呼んでるんですよ。最近ヤドクガエルはマニアの間でも人気で、ネット販売とかもしてるみたい。体も小さくて、色がビビッドなんですよ。赤とか青とか黄色とかね。フィギュアとかグッズもいろいろ作られてるんですよ。女の子たちもかわいいって言って。今の女の子は何でもかわいいって言うけどね。そういや、もう一人女子高生がヤドクガエル、見にきてたことがあったな。今、女子の間でヤドクガエル、ブームなんですかね？

オレ、フェイスブックやってて、偶然あやちゃんと繋がって、個人情報ゲットしたんですよ。十月四日が誕生日だって知ったんで、何かプレゼントあげたいなって思って、あの子が店に来たとき、四日の三時半にＳ公園に着てよ、ヤドクガエル、プレゼントするからって言っといたんだ。で、きのうプラスチックのケースにコバルトヤドクガエルを入れて、公園に持って行ってあげたんだよ。喜んでくれてたよ。なのに…、あやちゃん、死んでしまったんですか。あっけないですね。

えっ？　カエルもいなくなったんですか。ヤバくないですか。ヤドクガエルには人を殺せるくらいの毒があるって話ですけど。えっ？　オレがカエルであやちゃんを殺す？　どうして？　振られたからって？　オレが自分のアイドル、殺すわけないでしょう？　あやちゃん、毒あるって知ってるし。単にあの子のファンってだけで、無害ですよ、オレ。

山内圭

あやの友達。十六歳。

えっ？あやが死んだ…？　どうして？　事故ですか？　きのう学校でいつもと変わらなかったし、元気だったのに…。

あやとは中学のバレー部からの付き合いだから、五年くらいになります。大声で話したり、怒ったりしたとこ見たことがありません。穏やかで優しいっていうか、何か自己主張のない弱い感じがすることも多かったかな。わたしんちは、わたしが小学生の頃両親が離婚したから、母子家庭なんですよ。母は美容師で、働きづめでわたしを育ててくれたから、わたし、高校卒業したら、美容師の専門学校に行って、早く一人前になりたいんです。そしたら、母の仕事を手伝えるでしょ？　一緒に働くのがわたしの夢なんです。あやにはそんな目標みたいなものがないようだったから、恵まれた環境にあるのに、わたしなんかより選択肢もいっぱいあるのに、もったいないなって思ってた。

あやはかわいいし、スタイルもいいから、男の子にはよく声をかけられてたみたいだったけど、付き合ってる人はいなかったんじゃないかな。去年の春頃電車で素敵な人に会うんだって話してたけど、進展なかったみたいだし。そうそうペットショップの男がつけてきたり、写真撮ってるみたいで気持ち悪いって言ってたことがあります。あの子、ストーカーに狙われやすいのかな。去年のクリスマスの頃にもストーカー被害に遭ったんですよ。で、ツイッターに写真つきでそのストーカーをアップしたから、すごい騒ぎになって…。それまで話題の無い子だったのに、いきなりフォロワーがすごく増えちゃって、しばらく盛り上がってたな。えっ？　ストーカーの写真？　まだあると思う。ちょっと待ってください。顔が出ちゃったから、あのストーカー野郎も終わりですよね。女の敵だから、痛い思いすればいいんですけど。はいっ、これ、写真。ちょっとブレてるかな。なかなかハンサムなんだけどな。わたしの知ってる人にもちょっと似てて…。この人、何か関係あるんですか。

横山一馬

あやのストーカー？　二十四歳。

どうして刑事さんが？　吉川あやが死んだ？　吉川あやって誰ですか？　ストーカーの被害者？ああ、あの女の子ですか。わたしはストーカーなんかじゃありません。あの子が嘘をついたんです。

わたしは先生になるのが小さいころからの夢でした。だから、教員採用試験に再挑戦して合格し、去年の春、教壇に立てたときは本当にうれしかったです。T高校で生物を担当していたのですが、教材研究やクラスマネッジメントなど初めてのことばかりで大変でした。でも、毎日が充実していて楽しかったです。

電車で通っていると、乗る時間も車両も立つ位置も大体決まってくるものです。わたしの場合、六両目の一番後ろのドアから乗り込んで、連結に近いところに立っていたんですけど、毎朝同じ車両に乗ってくる女子高生がいました。髪の長い、スッとした感じの子で、わたしの方をチラチラ見てるのには気付いていました。制服はわたしの高校のとは違ってましたね。クリスマスの近づいたある日、夕方電車を降りて、改札出た辺りかな、その子が追っかけてきて、「クリスマスのプレゼントです。わたしが焼いたクッキー、食べてください」って、かわいくラッピングした小さな箱をオズオズと差し出しました。受け取って

やればよかったのでしょうか？　わたしは当時付き合ってる人もいましたし、教え子と同じくらいの子とは一線を引いておきたかったので、「ごめんね」と言って、受け取りませんでした。すると、その子はうつむいて、一瞬泣き出しそうに顔をゆがめましたが、すぐにわたしの目を見て、「写真だけ撮らせてください」と、いきなり携帯でわたしの写真を撮って、走って行ったんです。

　それっきりその子を電車で見かけることがなくなって、かわいそうなことをしたと思ってたんですけど、一週間ほどして、若い同僚の先生から、わたしの顔写真がツイッターにアップされて広がってる、しかも、「この男はストーカーです。気をつけてください」というコメント付きだって聞かされたんです。びっくりしました。個人情報流出がとやかく言われる時代になりましたけど、嘘の情報がまことしやかに瞬時に広がって、私の名前、住所、職場まで公になってしまって、収拾がつかなくなり、学校を辞めざるを得ない状態になりました。高校生が相手の職場ですから、女子高生をストークしたという噂が立つと、学校としても、そんな男性教師を置いとくわけにはいかなかったのでしょう。振られた腹いせにしては悪質ですよね。しばらく誰とも会いたくなくなって、引きこもってました。その女の子を見つけだして、謝罪させるとか裁判に訴えることもできたのでしょうが、ショックでそんな気力はありませんでした。思春期の女の子の気持ちを分かっていなかった自分にも責任があるような気もしましたし。

　話を聞いた大学のゼミ仲間が心配して何度も家まで来てくれたんですけれども、会う気にもならなくて…。冬眠していました。今年に入り、暖かくなってきて、少し外に出られるようになって、友達とも話せるようになったんです。九月から出身大学のゼミで指導していただいた教授の研究室で助手として採用していただきました。ものを言わない生き物を相手にしているほうが心が休まります。わたしはまだ人から逃げているのかもしれませんね。

　あの女の子…、殺されたのかもしれない？　もしかして、わたしが疑われているんですか。

山内圭

　えっ？　あのストーカー事件、嘘だったの？　あの男の人、どうなったんですか？　仕事も辞めて、引きこもっちゃったの？　何もしてないのに、ストーカーにされちゃったら、ショックだっただろうな。わたし、何も知らないで、おもしろがって騒いじゃった。あやはどうして嘘なんか…。プレゼント受け取ってもらえなかったリベンジ？　あの男の人があやの電車の中の王子様だったんだ。あやは振ることはあっても、振られること、なかったから、よけい傷ついたのかもしれない。男の子にもてててたから、案外自分に自信持ってたりして。わたし、彼氏できても、あやには紹介したくないって思ってた。何か知らないうちに取られちゃいそうで怖くて…。

前田祥子

　あのストーカー、あやの嘘だったんですか。クッキー、受け取ってもらえなかったから？　それで、あんなことするかな？　ストーカーの罪を着せるために写真、撮らせてもらった

なんて信じられません。もう会えないって思ったから、純粋に写真が欲しかったんじゃないですか？　思い出に…。

うーん、あの頃みんな、面白いことないかなって探してたような気がします。三人寄っても話のネタがないみたいな。あやっていつも聞き役だったから、自分も何かおもしろい話題、持ってこなくちゃってプレッシャー感じてたのかもしれません。日常生活にそれほどおもしろいことなんか転がってないのにね。毎日学校行って、半分寝ながら授業受けて、塾行ったり、クラブしたりしたあと、家に帰って寝るみたいな生活でしょう？　親だって、毎日変わり栄えのしない患者さんを何人も診察して、カルテ書いて薬出して、仕事終わったら家に帰って寝る、これの繰り返し。そんな繰り返しの人生、楽しいはずないですよね。変化もなければ、話題性もないですよ。えっ？　繰り返せることが幸せ？　そうなんですか？　いわゆる平凡な日々の幸せってことですか？　なんか何もチャレンジしない人の言い訳みたいに聞こえますけど。

あやはどんな気持ちでいたのかな。嘘ついて、相手の人の人生狂わせて。分かってたはずですよね。子どもじゃないんだし。正月明けから暗かったのは、そのせいかな。新学期になって、お姉さんの知り合いに家庭教師、やってもらってるんだけど、その人がいい人みたいで、最近明るくなってきたと思います。その人の影響で進路について真剣に考え始めてました。

久保龍次

あやの家庭教師。二十一歳。

刑事さん、どうかしましたか。おやって顔、しましたよね。どっかで会いました？　さあ？

ボクはあやちゃんのお姉さんのさちと高校のとき同じクラスだったんです。今年の三月にクラス会があって、久し振りにさちに会って、相変わらずコロコロしててパワフルで懐かしかった。近況しゃべってて、ぼくが大手の進学塾で講師のアルバイトしてるって言ったら、さちに妹の家庭教師してくれないかって言われたんです。塾に通ってるけど、引っ込み思案だから、分からないところがあっても、先生に聞けないみたいだし、ストーカーに狙われたこともあって、塾の帰りが物騒だからって。正月くらいからなんだか元気もなくて、進路とかも心配だって言ってました。それで、四月から週二回、英数を中心に教えていました。あやちゃんはおとなしいけど、理解力のある生徒でした。

きのう公園で彼女と話していたのはボクです。あやちゃんが相談したいことがあるから、家じゃなく公園で会ってほしいって言ったので。一時間くらい話しました。進路についての相談でした。科学に興味があるようで、ボクが薬学部にいることも影響してるのかな、薬剤師になるために薬学部に行くか、生き物、特に両生類の生態について研究する分野に進んだほうがいいのか迷ってるみたいでした。カエルが大好きだって言ってましたね。小さいころ、さちと田んぼでおたまじゃくしを捕ってきて、カエルになるまで育てたらしいんですけど、そのときの楽しい記憶がずっと残ってるみたいでした。ボクは、薬剤師を目指すほうが目標設定も簡単だし、かたい、でも、本当にカエルのことが好きでカエルのことを研究したいのなら、カエルの何に焦点を当てるか、もっと考えないとだめだよって言

いました。ドクガエルの皮膚からモルヒネより強い鎮痛剤を作る研究をしている薬学部もあるし、数少なくなってきたヤドクガエルを絶滅から救うために、その生態を調べ、保護したり繁殖を試みたりする研究もあるという話もしました。

どうして家で話さなかったのかって？　どうしてかな？　もう少し自分で考えたかったのかもしれませんね。親とかさちに知られると、絶対薬剤師を勧めると思いますよ。さちは現実的で割りと強引ですからね。あやちゃんなんか、いとも簡単にやり込められてしまうだろうな。

彼女が公園で死ぬことになったのはなぜでしょう？　刑事さん、何か分かりましたか？

川端頼子

あのう、この青いカエル、わたしが持って帰ってました。すみません。みんなでカエルを捜したとき、わたしが見つけたんです。あんまりきれいで珍しいカエルだったので思わず…。孫も欲しがりましたしね、ついポケットに入れて、持って帰ったんです。カエルを触ったけど、すぐ手を洗ったから何ともなかったですよ。持って帰ったのはいいんですけど、エサに困りました。何食べさせたらいいのか分からなかったので、ソーセージとかジャコとかやってみたんですけど、全然食べなくて、心なしか弱ってきたみたいで…。死んでしまったらかわいそうなんで返しに来たんです。なんとかしてやってください。ほんとにすみませんでした。

えっ？　ドクガエルで誰か、殺すつもりだったんじゃないかって？　そりゃ、ちらっと頭をよぎりましたよ。あいつを殺せたら、どんなにスッキリするかって。でもね、具体的にどうしたらいいか分からなかったし、わたしにもまだ理性、残ってますからね。

青田祐司

カエル、無事に戻ってきたんですか。「お帰り。元気か？よかったな」きれいでしょ？　このコバルト色。エサは生きたやつをやらないとだめですからね。やっぱり普通の家庭で飼うのは難しいかもね。うちに来てくれれば、生きたエサが手に入るのに…。素手で触って大丈夫だった？　黄色いフキヤドクガエルは一度に何百人も殺せるほどの猛毒持ってるって話なんだけど、コバルトのほうは毒性、弱いのかな。現地じゃ、ヤドクガエルたちは毒をもつダニやアリをえさにしているから、毒性を持つようになったらしいです。日本に輸入されたら、毒の無いエサしか食べさせませんから、だんだん毒が抜けてくるのかもしれませんね。どのくらいで無毒になるのか、オレ、知りません。

久保龍次

やっぱり分かってしまいましたか。そうです。ボクの兄は横山一馬です。あやちゃんからストーカー呼ばわりされた男です。兄は今大学の生物研究室の助手をしています。ボクと兄の姓が違うのは、兄が今年の九月に結婚して、嫁さんのほうの姓を継いだからです。嫁さんは真希さんというのですが、一人っ子なんです。兄とは学生のときからずっと付き合ってる、強くて優しい人です。兄が世間の人から白い目で見られても、兄のそばにいて支えてくれたんです。

ボクは兄をストーカーだと、面白半分にツイッターに載せた女が許せなかった。兄はせ

っかく手にした教師という仕事を根も葉もない一つの嘘で失ってしまったんですよ。それば
かりか信用も・・・。警察沙汰になったわけでもないのに、周囲の目は以前とガラリと変わ
りました。みんな無責任に噂をするので、兄はアパートから一歩も出られなってしまった
んです。ボクはその女を探し出して、みんなの前に引きずり出して、そいつの口から真実
を言わせて謝らせてやろうと思いました。でも、兄は、そんなことをしても、失ったもの
は取り戻せないし、まだ大人になりきれていない女の子に重荷を負わせるのはかわいそう
だと言って、ボクの行動を許しませんでした。

そんなときです。さちからあやを紹介されたのは。あやはボクを一目見て、一瞬ギョッ
として固まってしまいました。ボクは心の中で「見つけた！」って叫びました。ボクと兄
はよく似ていたんです。兄は心労で一年の間に若くして髪に白いものがめっきり目立つよ
うになったし、ずいぶんやせて眼鏡をかけるようになったので、以前とは別人になってし
まいました。だから、今はあまり似てませんが、あの事件の起きる前は、ボクが眼鏡を外
すと、双子と間違われるほどだったんです。そんなボクを見て、恐怖の表情を浮かべるな
んて、一人しかいないでしょう？　まあ、しばらく話すうちに、ボクがあのストーカーじ
やないことが分かって、ホッとしたようでした。

そのときのボクは兄にも釘を刺されてましたし、その子を殺そうとか傷つけようとか思
っていませんでした。ただ、普通の恵まれた家庭でぬくぬく育ったおとなしそうな女の子
がどうしてあんなたちの悪い嘘をついたのか、真実が知りたいと思っただけです。深い傷
を負わせる方法は、ネットを利用したらいくらでもありますよ。簡単にダメージを与えら
れますよ。その気にさせて、裸の写真を撮ってバラまくとかね。でも、そんなことしたら、
安易に嘘をつくやつや、注目されたがりのやらせ野郎や、匿名のひきょうなやつらと同じ
人種になってしまう。人間として大切なものを捨てることになりますからね。そんなこと
は絶対したくなかった。だから、あやちゃんには何も言わず、本当のことをつきとめよう
と思ってました。

家庭教師としてあやちゃんと接しているうちに、彼女がまじめで心配りもできる人間だ
と分かってきました。正体を隠しているのは騙しているような気がして、だんだん辛くな
ってきました。それで、彼女の口から、はっきりとあの愚かでひきょうな行為の理由を聞
こうと四日の日に会ったんです。

あの子は兄の話をポロポロ涙を流してうなだれて聴いていました。「本当にごめんなさい。
ずっとずっと謝らなくちゃと思ってたけど、どうしていいかわからなかった」って言いま
した。

電車で毎日見かける兄をステキだと思い始めてから、通学が楽しくなったそうです。兄
は生物の教師でしたから、それ系の雑誌を電車の中でよく読んでいたようで、彼女は青い
カエルや擬態する虫たちが表紙を飾っている本を目にするうちに、眠っていた生き物への
興味が呼び覚まされたって言ってました。彼女は兄のファンって感じだったのかもしれま
せん。友達に電車の中の王子様のことを話すのがうれしかったようです。もっとも友達の
ほうはそんなたわいのない幼い話には、それほど関心を示してくれなかったので、兄のこ
とは言わなくなったそうですが。ファンの一人としてのプレゼントを拒否されるなんて夢
にも思わなかったのでしょう。兄と付き合いたいとか全然考えてなかったみたいです。テ
レビの俳優やミュージシャンにあこがれるような気持ちだったのかな。それで、クッキー

を受け取ってもらえなかったとき、とてもショックだったそうです。思い出というか、何か兄のものが欲しくて、写真を撮って帰ったけど、兄の写真をボーッと眺めながら、自分で焼いたクッキー食べてたら、自分が恥ずかしくて惨めで、クッキーを受け取ってくれなかった冷たい兄をちょっと困らせてやりたいというよりも、かかわりを持ちたいって気持ちが湧いてきたようです。いつも友達に話題提供できなくて、負い目を感じてたから、みんなに面白いネタもあげられるし、と軽い気持ちであんな書き込みつきの写真をアップしたら、次の日は友達とその話題で盛り上がって楽しんだけど、ものすごい勢いで嘘の情報が広がっていって、自分でも怖くなったようです。あこがれていた兄に変態のレッテルを貼り付けてしまい、今更嘘でしたなんて言える状態じゃなくなって、自分のバカな行動を嫌と言うほど後悔したけど、どうにもならなくて・・・。兄にどっかで会ったらどうしようとか、嘘がばれたらどうしようとか、ずっとビクビクしてたようです。ボクに初めて会ったとき、兄が復讐しに来たと思ったそうです。

自分のことばかり心配してたみたいだけど、兄の身に起こったことは想像できなかったのかって聞いたら、怖すぎて想像するのをやめたって言ってました。出来心っていうか、いたずら心というか幼稚な行動だったって分かりました。なんか本当に兄が報われないなって感じがしましたけど、自分のやったことをずっと引きずってるあやちゃんもかわいそうになって、兄に会って、きちんと謝ってほしい、そのほうが君のためにもいいんじゃないかと言ったら、コクンとうなずいて、少し笑ったので、それでいいかなって思いました。

四日はそのあと、さちと会う約束があったので、待ち合わせの場所に急ぎました。

吉川さち

あの日、龍次から全部聞きました。あやのしたこと、彼のお兄さんに起きたこと、信じられませんでした。あやがあんなバカなことをするなんて・・・。いたずらでは済まない、犯罪の範疇に入りますよね。龍次にもお兄さんにも申し訳なくて、でも、謝る言葉も見つかりませんでした。

あやは何も言わないけれど、心になにか闇を抱えていたのかもしれません。あの子は小さいときから口数の少ない子でした。多分母とわたしがしゃべるもんだから、口を出せなくて聞き役に回っていたんだと思います。何か言いかけても、みんなの目が集まると、口を閉じてしまうこともよくありました。わたし、いつも早く言えって目で見てしまっていました。家でそんなだから、学校でも人間関係とか疲れていたのかもしれません。意識しないまま、ストレスが溜まっていたのかな？だからって、嘘ついて人の人生狂わせていいってことにはならないけど。

龍次にあやの家庭教師、頼んだのは本当に偶然なんです。もちろんあやのために頼んだんですけど、私の中に龍次と繋がっていたいって気持ちがあったことも否めません。龍次はわたしの初恋の人なんです。龍次を家に連れてきて、いろんなことが分かって辛かったけど、あやとわたしたち家族にとっても、龍次とお兄さんにとっても、よかったって思っています。もとに戻すことはできないけれど、前に進むことができるから。だから、このことが原因であやが死んだとは思えないんです。

あの日、龍次はあやの家庭教師はやめたいと言ってました。龍次に会うたびに、あやが自分の罪を思い出すのは辛いだろうし、龍次自身も事件のことはもう忘れて、新しい一歩

を踏み出したいからって。

山内　圭

えっ？　刑事さん、どうしたんですか？　わたしの部屋になんで入ってくるの？　やめてください！　勝手にいろいろ触らないで！　えっ？　ヤドクガエルなんかいるわけないでしょう？　学校の近くのペットショップへは行ったことありますよ。行ってもいいでしょ？　ネットでカエルを買った？　ショップのオーナーのパソコンにわたしの名前があったの？　あっ、そこは…。あーあ、見つかっちゃった。

そうよ。通販で黄色いヤドクガエル、買ったよ。一番毒性が強いって書いてあったから。どうしてって？　分かってるんでしょ？　あやを殺したかったからよ。あやが久保先生を取ろうとしたのよ。久保先生はわたしの通ってる塾の先生なの。数学と化学教えてくれてる。初めは、教え方がすごく分かりやすかったから、いい先生に当ってラッキーって感じだったんだけど、だんだん憧れから大好きな人になってきた。なのに、あやの家庭教師、始めちゃって…。家庭教師って一対一じゃない？　あやがうれしそうに久保先生のこと話すようになってきて、またかって思った。

中学生のとき、わたしがバレー部の先輩のことすきだって、もらしたら、「圭ちゃん、がんばってね。応援するわ」なんて言いながら、二人の間を取り持ってくれてると思っていたら、いつの間にかあやが先輩と付き合ってた。えっ？って感じだった。高校に入ったばかりの頃、三人でモールに行って、ウィンドショッピングしてたとき、雑貨屋さんでとてもかわいいリュック見つけたの。赤いレザーでできてて、大きさもちょうどよかった。でも、手の出ない値段だったから、しばらく悩んだけど、お小遣い貯めて出直すしかないなって諦めたの。一週間後に三人で映画に行ったんだけど、その時あやがあの赤いリュックを無造作に肩にかけてた。わたしが欲しがってるの知ってるはずなのに。で、今度は久保先生。

あやがだれのことを好きになっても、そんなの彼女の自由だし、何も言えないの分かってる。でもね…。あやは意識しているのかどうか分からないけど、わたしの欲しいものを簡単に取ってしまう。友達って何だろう？　わたしはあやにとって彼女の優越感を満足させる存在でしかなかったんじゃないかって。わたしんち、経済的に余裕なかったし、私自身ごっつくて可愛いとは程遠いルックスだし。あやのわたしに対する接し方は祥子に対する態度とは全然違ってて…。悔しかった。悔しくて悲しくて、あやが消えて欲しいって思ったの。それで、あやの大好きなカエルを使って殺してやろうって通販で猛毒のフキヤヤドクガエルを買っちゃった。

あの日、あやが公園で久保先生に会うって言ってたから、わたし、学校から帰ったら急いで公園に行って待ってた。あやが先生と話してるのも、先生だけ先に帰るのも見てた。子どもたちやおばあさんも帰って、公園にだれもいないのを確かめて、そっとあやに近づいた。あいつの顔にカエルをぶつけてやろうとしたの。後から近づくと、あやの肩が震えてて、泣いているのが分かった。静かにずっと泣いていた。悲しみが後から後から溢れてくるようだった。感情をむき出しにしているあんなあやを見たのは初めてかもしれない。

だから、カエル、ぶつけられなかった。カエルをまた家に持ち帰って、そのビンの中で飼ってたの。わたしはあやのことが大嫌いだけど、殺せなかった。

三、佐山刑事の検証

事件担当の佐山刑事は、あやの周りの人々の話を聴くにつれて、「吉川あや」という女の子の持つ多面性と思春期という悩める時期の女の子たちの屈折した友達関係が見えてきて、子どもたちもなんだかしんどそうだな、もう少しシンプルに生きられないのかと、大きなため息をついた。今日は自分が掴んだ事実を確かめようと、重い気持ちを奮い立たせ、事件発生から一週間経った金曜日の三時前、S公園にやってきた。佐山は、あやの座っていたベンチに腰を下ろして、夜になるまでこの公園の住人になる覚悟をした。この公園でどんな人が何をしているのか、時間経過とともに自分の肌で感じようと思ったのだ。抜けるような秋晴れで、雲ひとつ無く太陽が照り付けている。佐山は恨めしそうに空を仰いだ。

三時頃には子どもたちの姿はなく、静かだった。郵便配達の男の人が二人、バイクを降りて用を足し、ベンチで休憩をとっている。リラックスして談笑している様子が見てとれた。しばらくすると、小学生たちが自転車に乗って、二人、三人と集まってきた。男の子たちは自転車で走り回ったあと、誰かが持ってきたボールでサッカーを始めた。女の子たちは滑り台の辺りで高オニをしたり、タイヤブランコに群がったりして遊んでいる。砂場の近くのベンチは、郵便配達人に替わって、中学生たちが陣取っている。寝そべったり、携帯をいじったり、思い思いに過ごしている。

四時を過ぎた頃、白い車が二台、公園に乗りつけた。中から三人のお母さんと、二歳から四歳くらいの子どもたちが五人、バラバラ出てきた。階段を上ったところに設置された幼児用の遊具で子供たちを遊ばせながら、母親たちはおしゃべりしている。そのそばのベンチには制服でやってきた男の子が一人、仰向けに寝転んで時を過ごしていた。あのカエルのおばあさんも自転車に孫を乗せてやってきて、砂場でバケツやスコップを使って何か作っている。バケツでこしらえたケーキに草や小さい枝を突き刺して「ハッピ　バースデイ　トゥー　ユー」とか歌っている。佐山は思わず微笑みながらも、孫守りもなかなか大変だなと思った。

五時ちょうどに時計台の上のスピーカーから「夕焼け小焼け」のメロディーが流れると、半数ほどの小学生が「バイバイ」と言って帰り、五時半には小学生たちの姿はなくなった。その頃には散歩する老人たちが何人か見かけられるようになってきた。第一発見者の寒川さんも六時前に公園に入って来て、まっすぐ前を向いて足を運んでいる。一人でやってくるお年よりは脇目も振らずストイックに歩いている人が多いのに意外な感じがした。顔には何の表情も浮かんでいない人もいて、果たしてウォーキングを楽しんでいるのだろうかと首を傾げてしまうのだが、自分にタスクを課して努力する日本人ならではの価値観が表れているとみることもできる。

六時になると、子ども連れの母親たちも孫連れのおばあさんも帰ってしまい、七時前になると、暗くなって肌寒くなってくるためか、ベンチでグズグズしていた学生たちも公園を後にして、誰もいなくなってしまった。佐山もそろそろ腰を上げようかと思ったとき、あの斉藤夫妻が公園に入ってくるのが見えた。刑事に気付き、目礼をして、ゆっくりと歩いていく。ご主人が奥さんの手を取って、何かにこやかに話しながら、階段を上っていく。その仲むつまじい様子に、オレたちもあんな夫婦になれるのだろうかと、佐山は夫を当てにすることを諦めたような妻の顔を思い浮かべていた。

老夫婦は二周ほどすると、刑事の座っているベンチに腰を下ろし、いつも持ち歩いてい

るという水筒から熱いコーヒーを入れて、刑事にも勧めた。
「刑事さん、砂糖とミルクは？」
「どっちもいただきます」
「なんか意外ですね。ブラックかなと」
「実はわたし、甘党なもので、砂糖も二袋欲しいくらいで」
「ハハハ、二袋でも三袋でも入れてください。お疲れのときは、やはり体は糖分を欲しがるものですからね。ずっとここに座ってらしたんですか」
「ええ、三時頃からいるんですが、この公園にはいろんな世代のいろんな人が集まってくるんですね。時間や場所で棲み分けしているようなところもあって興味深いです」
「なるほど、棲み分けですか。わたしたちは人のあまりいない静かな公園が好きですから、この時間帯になりますね。これからはだんだん寒くなりますけどね」
「そうですね…。きょうはお二人をお待ちしていたんです」
「えっ？」
「斉藤さんの奥さんは認知症じゃないですね。自転車の転倒事故で脳の言語中枢を損傷された」
「お調べになったんですね」
「ええ。それで、どうして嘘をつかれたのかと…」
「いずれにしても、脳の機能が麻痺してるわけで、いろいろ説明するよりも認知症だといったほうが分かりやすいかなと思ったもので…」
「斉藤さん…。奥さんの事故の調書を読みました。それによると、斉藤さんは中学生の女の子が故意に事故を誘発させるような行為をしたと主張なさってましたね」
「そうです」
「一体何があったんですか。あなたの口から本当のことを聞かせていただけませんか」
「刑事さん、いたずらというものはどの程度まで許されるのでしょう？」
「いたずらですか…。」
「そう、ほんの些細ないたずら…」
「そうですね、難しいです」
「刑事さんはわたしがしたことをご存知ですね」
「多分…」
「そうですか…。あの事件はわたしがまだ大学で教えていたおととしの秋に起きたんです。うちは山の手にありますので、駅に行くには長い坂道を下っていきます。その日も大学に行くのに長い下り坂をゆっくり歩いていました。その坂道は狭い割りに交通量が多いせいか、よく道が一部陥没することがあります。市が直しに来てくれるのですが、やはり一ヶ月ほど放っておかれることもざらなんです。その日も、坂の中ほどの道の左寄りに五十センチ幅の穴ができてるのを見つけて、暗くなったら穴が分かりづらいからバイクや自転車はタイヤを取られて転んで、大怪我しかねないなと思いました。帰りは当然長い坂を上らなければなりません。薄暗くなってきた坂を歩いていると、ずっと先のほうに朝見た穴があるのが分かりました。わたしの七、八十メートル先を歩いていた女の子も、その穴に気付いて、少し立ち止まりました。そして、手に持っていたチラシか何かを穴の上に並べたんです。わたしは彼女の行動の意図を理解するのに少し時間がかかりました。信じられな

い行動でしたから。ちょうどその時、坂の上のほうから妻が電動自転車に乗って降りてくるのが見えました。わたしは咄嗟に思いっきり手を振って、止まれって叫んだと思います。ところが、妻は何を勘違いしたのか、笑いながら、わたしに向かって手を振り返したんです。そして・・・」

「奥さんは穴に気がつかず、タイヤを落とし、自転車から振り落とされ、頭を強打した」

「そうです。今でも目に浮かびますよ。妻の体がポーンと投げ出された光景が・・・。静止画のように・・・。わたしは前を行く女の子を見ました。その子は振り返って倒れた妻を見てニッと笑ったんですよ」

「笑った・・・」

「その子を捕まえなきゃって思いましたが、妻を放っておけません。妻を道路の脇に寄せて、救急車を呼んだんです」

「警察はどう動いたんですか」

「S中学の長い髪の毛の女の子というわたしの証言だけでは動きにくかったみたいですね。女子生徒の顔写真全部見せてもらったんですが、特定するのは難しかったです。何人かには事情調書もしたみたいですけど、相手は未成年でもあるし、結局うやむやになってしまいました。でも、わたしは実際にあの子を見たら、絶対に見誤らないという自信はありました。あの歪んだ笑顔は忘れられるものではありません」

「それで、ご自分で捜していらっしゃったんですね」

「ええ、近所に住んでるはずだと思いましたので、あちらこちらルートを変えて散歩がてら捜しました」

「毒物は？」

「わたしの勤めていた大学には薬学部もあるんです。公になれば、大学に迷惑がかかりますね。ただ、何か本当に手に入れたいと思ったら、人は大胆かつ細心の注意を払って、なんとかして手に入れるものですよ。どんなに厳重に管理されててもね。使ったのは、トリカブトから抽出したアコニチンという猛毒です。カフェインと一緒に摂ったら、より毒性が強まるとあったので、いつもコーヒーをポットに入れて、あの子と出会うチャンスを待っていたんです」

「ずいぶん気の長い話ですね」

「ええ、わたしには時間だけはたっぷりありますからね。急きも慌てもしませんよ」

「そして、あの日、出会ってしまった」

「ええ、すぐあの子だと分かりました。かわいい顔の下に本性が透けて見えるようでした」

「あの子はあなた方のことを覚えていなかったのですか」

「さあ、一瞬妻をジッと見たようでしたが、自分のことで頭がいっぱいといった感じでしたね」

「ためらいはありませんでしたか」

「何をためらうんですか。もしかしたら、あの子はまた軽いいたずら心を起こすかもしれないんですよ」

「いえ、あなたがいなくなると、奥さんは・・・」

　すっかり暗くなった公園は昼間のにぎわいが嘘のように、冷たい入れ物と化していた。斉藤氏は寄り添う奥さんの両手を自分の両手で包み、ゆっくりと撫でていた。いつのまに

か灯った公園の蛍光灯がベンチの三人を照らし、その三つの影は心細そうにゆらゆらと揺れていた。

（了）

四百字詰原稿用紙六十一枚

（参考）

船山信次『毒、青酸カリからギンナンまで』ＰＨＰ研究所、２０１２